

Let's know Hiroshima Castle.

# しろうや！ 広島城



No.37



近藤 勇 (国立国会図書館デジタル化資料)

## 新撰組の近藤勇、広島を駈ける!!

新撰組とは幕末の京都で結成された浪士集団です。豪傑肌の局長近藤勇、時として冷血な副長土方歳三、病身の天才剣士沖田総司のほか、個性豊かな剣客として斎藤一・永倉新八・原田左之助・吉村貫一郎など多くの隊士の活躍が、映画やテレビドラマに取り上げられています。

なんと、この新撰組を率いた近藤勇が広島を訪れているのです。慶応元年(1865)の終わりから慶応2年(1866)の初め、長州戦争の混乱で広島城下が賑やかだった時期です。

## 1 第一次長州出兵

元治元年(1864)7月19日、京都御所に向かった長州藩兵と、それを阻止しようとする会津藩兵や薩摩藩兵との戦闘は、その最大の激戦地から“蛤御門の変”と呼ばれています。わずか一日の戦いは長州軍の敗退で終わりますが、「御所に向けて発砲した」という罪状によって、孝明天皇から長州征伐の勅命が下ります。

勅命を請けた将軍徳川家茂は、征長総督として前尾張藩主の徳川慶勝を任命し、西国の諸藩に動員を命じます。これが長州戦争の発端です。

長州藩では、「蛤御門の変」を起こした責任は、軍を率いて上京した福原越後、益田右衛門、国司信濃の三人の家老にある」として、三人の家老に切腹を命じ、恭順の意志を示しています。11月14日、征長軍の本営が置かれていた広島城下の国泰寺(現広島市中区中町)で三家老の首実検が



三家老首実検の図(写)

広島城蔵

行われ、その結果、慶勝は征長軍を解散させます。

ここまでが第一次長州出兵ですが、幕府や朝廷の内部には、「この処置が生ぬるい」とする意見が強く、再度勅命が下され、二度目の長州出兵が計画されます。

## 2 第二次長州出兵

慶応2年(1866)6月、征長軍と長州藩の戦闘は大島口・芸州口・小倉口・石州口の四か所で始まります。戦闘は長州側が有利に展開し、小倉城や浜田城が炎上します。9月2日、幕府軍艦奉行の勝海舟と長州藩士の桂小五郎や広沢兵助らが、厳島の大願寺(現廿日市市宮島町)で会談し、休戦協定が締結されます。これが第二次長州出兵(長州藩では四境戦争と呼ぶ)です。

この第一次長州出兵の終結から第二次長州出兵において征長軍と長州藩の武力衝突が始まるまでの間、さらなる罰を与えたい幕府側と、武力を備えるために時間をかせぎたい長州藩との駆け引きが、広島で展開されます。

幕府と長州藩の話し合いには、幕府の要人や長州藩の代表が広島を訪れています。

## 3 広島での近藤勇

新撰組局長の近藤勇は、幕府側代表の大目付永井尚志なおゆきの従者として、新撰組隊士を伴い広島を訪れています。

慶応元年(1865)11月、近藤勇が新撰組の後援者である佐藤彦五郎にあてた手紙では、武田観柳斎・伊東甲子太郎・山崎烝・吉村貫一郎・芦谷登・新井忠雄・尾形俊太郎・服部武雄と共に広島に向かうこと、新撰組局長代行職を土方歳三に託し、天然理心流の後継者を沖田総司に指名したことを述べています。近藤が、かなりの決心で広島に来たことが窺えます。

大目付永井尚志、目付戸川鉾三郎、目付松野孫八郎を中心とする幕府代表の一行は11月7日に大坂を出発し、11月16日に広島に到着、近藤たち主だった新撰組の隊士は、永井尚志の宿舎であった広島藩の客屋(現広島市中区大手町)に宿



### 広島藩の客屋の建物を利用した料亭

「広島諸商仕入買物案内記并名所しらべ全」(明治16年〔1883〕刊。広島市郷土資料館蔵)より

泊しました。

11月20日、国泰寺で行われた永井による長州藩代表への訊問の場に、近藤は新撰組のなかでも学者肌の武田観柳齋・伊東甲子太郎・尾形俊太郎を伴って同席しています。その場で永井は、自分の家来として、近藤を給人、武田を近習、伊東を中小姓、尾形を徒士として紹介し、長州藩領への派遣を要請します。しかし、これは長州藩代表の穴戸備後助びんごのすけに拒絶されています。

22日に永井は、これまで長州藩との折衝に当たっていた広島藩士の植田乙次郎・寺尾生十郎の二人から、さらに近藤たちも長州との折衝役に加えようと、長州藩士の広沢兵助に伝えました。しかし、広沢はこれを拒否して、これまで通り、折衝役は植田・寺尾に限るよう要望しています。翌23日、長州藩士大津四郎右衛門が客屋に近藤を訪ね、その夕刻には、近藤・伊東・武田の三人が長州藩の宿舎(現広島市中区寺町)に大津を訪ね、



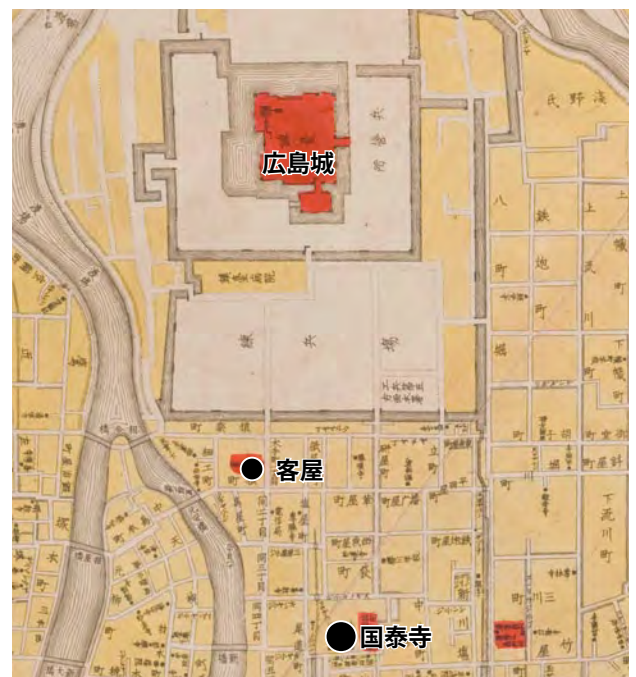
### 西方向から見た江戸時代後期の国泰寺

芸州広島之図(広島城蔵)より

そこで広沢と松原音三が同席して会談します。会談の内容は定かではありませんが、改めて広沢から近藤に、長州藩への入国拒否が伝えられたと思えます。

12月11日夜に、近藤・伊東・武田の三人は、再び長州藩宿舎に広沢を訪ねます。ここでは、「帰藩する長州藩士に同行して長州藩に入国したい」と申し出るのですが、またまた拒否されます。おそらくは、これで近藤も長州藩への入国を諦めたと思われます。

その後近藤は、広島藩士の植田乙次郎・寺尾生



### 客屋・国泰寺の位置

広島市街明細地図(明治15年〔1882〕刊) 広島城蔵

十郎に、岩国藩の重臣目加田喜助・塩谷鼎助・大草終吉あての紹介状を書くよう依頼し、14日夜、これを持参して伊東・武田と共に、海路、岩国の新湊港に到着します。翌15日に、新湊で岩国藩役人の西村五郎左衛門に入国を要請しています。岩国藩では取りあえず、塩屋甚左衛門宅を宿舎に与えますが、翌16日、岩国藩は正式に近藤たちとの会見を拒否し、この計画も失敗に終わります。近藤たちは即日、広島に帰らざるを得ませんでした。

この16日には、永井尚志らは訊問の内容を報告するため、広島藩の蒸気船震天丸を借用して大坂に向けて出発します。翌17日、近藤・伊東・武田の三人は永井を追って、陸路、帰京の途に着きます。ただし、途中まで近藤ら三人と行動を共にしていた尾形は、11月20日以降は別行動を取ったらしく、その行動の内容も不明です。また、新井・服部・芦谷の三人の、広島での行動についても全く不明です。さらに、山崎と吉村は、具体的な行動は分からないものの、しばらくは京都に帰ることなく、広島に留まっていたようです。

#### 4 京都守護職への報告

12月22日、広島から帰京した近藤は、会津藩の役人に、広島で収集した長州藩の情報を報告しています。

そのなかで、「長州藩の代表である穴戸備後助は、家老と名乗っているものの、実は身分の低い一家来にすぎない」とか「長州藩の代表者は謹慎恭順の姿勢であったが、内々に戦いを覚悟している。一方、征長軍には士気が無く、戦えば負けるであろう」「これ以上に、厳しく長州藩を取り締まるべきではない」との見解を述べています。

無骨者のイメージの強い近藤勇ですが、しっかりと現状を把握しているのには感心します。

#### 5 近藤勇の二度目の来広

さらに近藤の行動はこれに終わらず、翌慶応2年(1866)の1月27日に、近藤・伊東・尾形・篠原泰之進の四人が、広島に向けて京都を出発しています。2月3日には広島に到着し、前回と同じく広島藩の客屋に宿泊しています。

広島では、近藤と尾形、伊東と篠原に別れて行動しており、任務を終えての帰路も別行動でした。また、近藤と尾形が3月12日に帰京したことは分かっていますが、その間の広島での活動内容については不明です。一方、伊東と篠原は2月11日に幕府老中の小笠原長行と面談、3月7日には在広の柳川藩や唐津藩の藩士と会談しています。この二人は3月18日に海路で広島を出発し、備後国の鞆の浦、讃岐国の多度津に立ち寄った後、27日に帰京しています。

一方で、新撰組探索方の山崎丞と吉村貫一郎は、少なくとも9月までは、広島近辺に潜んでいたらしく、6月15日の報告書では、芸州口の戦闘の様子を詳細に伝えています。

近藤勇と言えば、池田屋騒動など京都における反幕府派浪士への警察活動で名を馳せましたが、明治維新への一大画期となる長州戦争の時期に広島を訪れ、長州の動向を探索していたことはあまり知られていません。広島における近藤勇の働きからは、剣豪という枠では説明しきれない、別の人物像が垣間見えてきます。

(広島城ボランティア「ひろしま歴史探検隊」尾川健)



編集・発行  
財団法人広島市未来都市創造財団  
広島城  
〒730-0011  
広島市中区基町 21-1  
電話：082-221-7512  
FAX：082-221-7519

平成26年1月21日発行

#### 広島城利用案内

開館時間：9：00～18：00  
(12月～2月の平日は9：00～17：00)  
入館の受付は閉館の30分前まで  
入館料：大人360円(280円)  
シニア(65歳以上)180円(100円)  
小人180円(100円)  
( )内は30名以上の団体料金

休館日：12月29日～31日  
ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>



携帯サイト

「しろうや！広島城」のバックナンバーは、広島城のホームページからダウンロードできます